

## アワーミュージアム

第 12 号 2000年2月10日発行



## ヒメホソアシナガバチ

和田 賢次

私たちがよく見かけるハチに、スズメバチやアシナガバチがあります。スズメバチは大きな丸い巣をつくるし、アシナガバチは家のまわりでハスの実を逆さにしたような形の巣をつくり、巣にはたくさんいくぼうの小さいへや育房があって、この部屋でこどもを育てます。

これらのハチは、繁殖とそれ以外の仕事を分業して集団生活をするため、社会性のハチと呼ばれ、日本には食肉性のハチ(狩りバチ)ではアシナガバチとスズメバチのなかま、食植性のハチ(花バチ)ではコナバチ、マルハナバチ、ミツバチなどのなかまがすんで

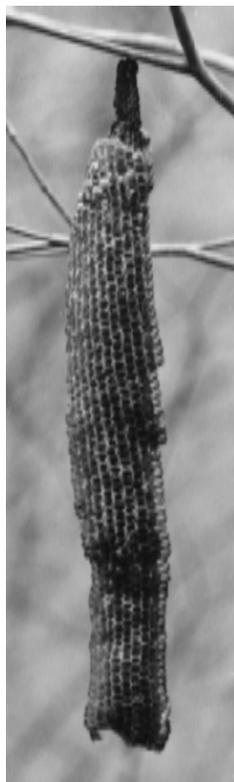


図1：ヒメホソアシナガバチの巣(菊池均会員撮影)

ひょうだい表題のハチは名前からわかるように、ごく普通に見かけるアシナガバチのなかまですが、その中でも腹部第1節(おなかのいちばん細いところ)が細長い柄えのようになったホソアシナガバチのなかまです。

ヒメホソアシナガバチは、コホソアシナガバチとかトウヨウホソアシナガバチとも呼ばれていますが、これらの名前はよく似た種類のホソアシナガバチ(ムモンホソアシナガバチ)より少し小さいのでつけた名前です。

このハチは北海道を除く日本全土に分布しているそうです。

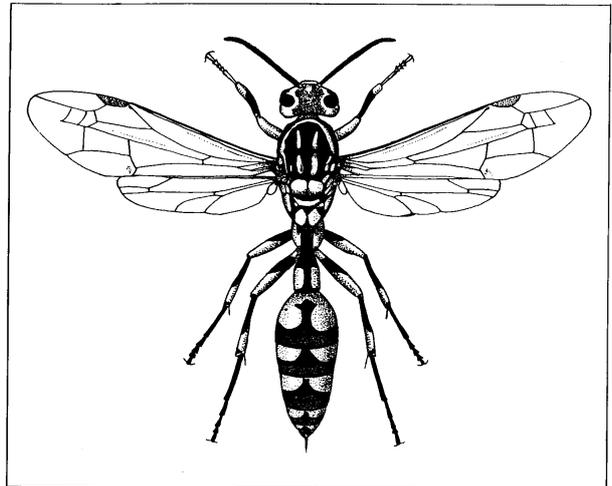


図2：ヒメホソアシナガバチ ( )

が、山地性のためかあまり多くの記録がありません。私は、名東郡佐那河内村大川原にある「いきものふれあいの里・ネイチャーセンター」前(標高720m)で、徳島県で2例目(最初の記録は祖谷溪)となるこのハチの巣を見ることができました。これは、1998年9月30日に、野鳥観察中の吉田和人さんが、エゴノキの地上4.6mの細い枝からヒモ状に垂れ下がった巣を発見したものです(図1)。巣の色は灰色～灰褐色で写真のように長く、長さ32.5cm、育房数687、育房は直径4～5mm、深さ15～20mm、まゆのふたは灰白色でした。

低い草木の葉裏につくったホソアシナガバチの巣は林の中でときどき見かけますが、ヒメホソアシナガバチのこんなに長い巣を見たのは初めてでした。ところがつい先ごろ、日本野鳥の会の松本久市さんに聞いた話では、少年時代を過ごした那賀郡木頭村では、ときどきこの長い巣を見かけたそうです。

どこかでヒモ状の巣を見つけたら博物館へ知らせてください。成虫は図2のようで、アシナガバチより色が淡くて細く感じ、ホソアシナガバチとは頭楯とうじゆんの中央に縦長の黒い紋たてながもんがあるので区別できます。

<わだ けんじ：友の会会員>



No: 大塚彬斗君

大塚彬斗君は、昨年9月26日に開催された友の会行事の「園瀬川釣り大会」でみごと優勝しました。インタビューもあわせて紹介します。

ぼくの大すきなたからもの

大塚 彬斗 (佐古小1年)

ぼくは、大すきなものが、たくさんあります。それは、さかなつりです。

メバルやカサゴやギンポ、グレなどです。うみで、つっているととてもたのしいきぶんです。でも、小さなさかなは、にがしてやります。「はやく大きくなあれ。」とおもいます。



大塚彬斗君

山も大すきです。それは、ぼくのすきなむしが、いるからです。トノサマバッタやクワガタ、カブトムシ、カマキリやカミキリムシなどです。だからぼくは、いきものが大すきです。2年前に、おかあさんがつくっているパセリに、キアゲハのようちゅうをはっけん。それからまいにちパセリをたべて、パセリがなくなりました。そして、さなぎになって、あるひキアゲハがへやの中をとびまわったときは、ぼくの心ぞうは、大ぼくはつしました。

ぼくの大すきないきものがいっぱいそだつように、うみや山、川をきれいに大せつにしたいです。

<おおつか あきと：友の会会員>

- 釣り大会のほか何の行事(友の会)に参加しましたか?

大塚君：竹でっぼうづくりに行きました。

- 感想はいかがでしたか?



お父さんと一緒に参加した釣り大会の様子

大塚君：竹でっぼうをつくり、飛ばせたときがうれしかったです。

- キアゲハの幼虫はどうやって育てましたか?

大塚君：おうちの中でパセリの鉢と一緒におきました。

- キアゲハが飛んだときはどんな気持ちでしたか?

大塚君：外へ逃がしてやりましたが、とてもうれしかったです。

.....

キアゲハの幼虫を育て、自然に帰したのは彬斗君が3才の時だそうです。お母さんの話によると、彬斗君の手のひらにのせ、外へ逃がしてやろうとしても、手から放れなかったり頭にとまったりしたそうです。その光景を見て、親子で感動したそうです。また、その光景はドラマを見ているような気分であったとも言われました。

No: 太田尚子さん

小松島市にお住まいの太田尚子さんは、フィールドワークが得意です。今回は下北半島のニホンザルの調査について寄稿してくださいました。

下北半島のニホンザル調査に参加して

太田 尚子

しもきた  
青森県下北半島に生息するニホンザル(図1と2)は、「世界最北限のサル」であり、1970年に国の天然記念物に指定されている。「下北半島のサル調査会」では、特に半島の南西域、脇野沢村周辺に生息するニホンザルについて、毎年夏と冬に

1週間ほどの調査を行っている。この脇野沢村周辺には6つの群が存在し、調査メンバーは、これらの群の遊動ルートや食べ物、群の構成と個体数、タイワンザルの有無などを中心に調査している。群の中には、名前が付けられ個体識別されているサルも多くいる。

私はこれまでに「サル調査会」が実施する冬季調査に4回参加した。はじめは何もわからず、ただ野生のサルを見られることが楽しいだけだったのだが、参加するうちに、しだいにサルとのつきあい方や、調査の楽しみがわかってきた。

まず、調査におけるサルとのつきあい方だが、山の中だけを遊動するサルは人間を警戒するのでなかなか近づけない。その場合は遠くから見る方法をとる。反対に、遊動範囲に脇野沢村の集落が含まれている群のサルは、人間に慣れてるので人が近づいても逃げることがなく、近くで観察できる。しかし、こちらが緊張して近づくと逆に警戒してしまうので、サルを意識せず、普通に装って何気なく近づくようにするのがコツだ。サルを観察する際、気をつけなければならないことは、目を凝視しないこと、"威嚇されてもあわてないことである。個体によって性格に違いがあり、人間との間に保つ距離はまったく違っている。観察の際には、サルを尊重するためにも、ある程度の距離を保つのがマナーである。

寒さに震えながらも調査に参加したいと思わせる魅力が下北半島の冬の森の中にはある。間近で



図1：下北半島のニホンザル



図2：車道を渡るニホンザル

サルの行動をじっくり観察できる楽しみと、サルの群をフィールドサインなどから探し出す楽しみだ。サルを観察していると、一頭一頭、顔も違い、個性があることがわかる。その動きのかわいさやおもしろさに見ていて飽きることもない。雪の上に残された糞や食痕、足跡を探していると、ノウサギやカモシカなどサル以外の動物に思いがけず出合えることもある。

ところで、野生のニホンザルの群には「ボスザルが存在しない」ということを知っていますか？確かに、群を見ていると、体格のよいオスザルや、一目置かれているメスザル等はいるが、威張った「ボス」がいないことがわかる。じつは、このボスザルとは人から餌をもらう動物園やサル山公園に見られる特有の現象である。いつも決まった量の餌しかもらえないため争いになり、力の強いサルが餌を独り占めするようになった結果なのだ。野生のサルは食べ物の取り合いでけんかをする必要もなく、群の中で頼り合い、仲間の動きを気にしながら生活する本来の姿を見せてくれる。

下北半島のサルの調査に加わることで、これまでの認識とは違ったニホンザルの習性などが分かってきた。ニホンザルの調査は、楽しいだけでなく、サルとの間に距離をとりつつ観察するという、一つの野生動物とのつきあい方を教えてくれる。これからもテーマを持って、「下北半島のサル調査会」に参加し、楽しく有意義な調査にしたいと思う。 <おおた なおこ：友の会会員>

## No. 12: 井口利枝子さん

井口さんは、「とくしま自然観察の会」の世話人をされており、その会で『しおまねきブック』というすてきな本をだされています。今回は干潟に関する想いを語っていただきました。

## 干潟との出会いで思うこと

井口 利枝子

今、私はまわりの知人や子どもたちには自然好きの「シオマネキのおばさん」で通っています。6年前から、身近な自然を見なおしたり、発見したり、考えたりする自然観察会を吉野川河口の干潟ひがたや城山しろやまを中心に開いてきました。干潟の面白さは格別です。干潟は川と海が出合って、お互いの個性が混ざり合ってたくさんの生命はくくを育む場所です。得意満とくい まんめん顔の子どもたちが手のひらにのせてきたのは、カニがつくった米粒くらいの大きさのどろ泥だんごと小さなカニの赤ちゃん。泥ながくつに長靴を取られて悪戦苦闘する子。漁師のおじさんやお年寄りの昔話に耳を傾ける人。干潟ではみんながいきいきとしています。

夏の干潟にじっと腰をおろしていると、最も目につくのがシオマネキのなかまです。その体にふっふっ不釣り合いな巨大な片方のはさみを振る姿はゆったりとして、とてもユーモラスです。昔は西日本に広く分布していましたが、護岸工事などによつて干潟がつぶされ、だんだんと姿を消し、今ではごく限られた地域に細々と生息しているだけに



図2: ハサミをふるシオマネキ

なっていました。吉野川の河口の干潟は、シオマネキの群生地として、九州ありあけかいの有明海と並ぶほどの貴重な生息地なのです。また「市民による吉野川のシオマネキ調査」を呼びかけ、調査結果を博物館の研究報告に載せていただきました。干潟みりよくの魅力は、シオマネキのような貴重な生物はじめ、湧きあがるような生き物たちの姿をすぐそばで見えるというだけではありません。そこから、生き物たちのつながりや人と自然との関わりが見えてきたりします。でも、干潟からずっとたどっていけば、最近、徳島の自然がどんどん変わって行くのが、よく見えてきます。もっと便利に、もっと豊かにと、橋や道路がたくさん通り、空港ができ、海辺が埋め立てされ……。もっとのんびりといきいきと暮らしながら、私たちの住む町の自然の価値に気づき、そういう自然そのものやそんな想いも伝えたい。干潟きよてんを拠点にそんな仲間が少しずつできはじめています。

&lt;いぐち りえこ：友の会会員&gt;



図1: 吉野川河口の干潟で開催された自然観察会



## 博物館紹介 11

## 徳島市立徳島城博物館

石原 侑

徳島城博物館(図1)はJR徳島駅近くの徳島中央公園内にあり、徳島藩やその藩主である蜂須賀家を主なテーマとした博物館である。このあたりは徳島城があったところで、国の名勝に指定されている「旧徳島城表御殿庭園」が博物館に隣接している。入り口の券売り場は「表御殿庭園」の入園券だけで、博物館の方は博物館の受付で求める。

博物館へ入ると、建物のわりに展示スペースが少ないことに気づくと思う。玄関ホールとラウンジがゆったりしていることもあるが、講演会や講座などに使用される畳敷きの大きな和室があるためである。

展示スペースは、企画展示に127と常設展示!"(藩政の変遷・大名のくらしと文化)に184、#\$ (城の構え・城下町のくらし)に211、%(阿波水軍の活躍)に107使われている。この中に、国指重要文化財「千山丸」(図2)と徳島城御殿の50分の1模型といった大型の展示物があるので、その残りしか展示のスペースがない。

展示の内容は、それぞれのテーマから想像できると思うが、「城下町のくらし」は、藩主に関する展示に庶民に関することを付け足した感じである。また、「城の構え」は徳島城御殿の模型を展示の目玉としているが、現在の大阪城や姫路城



図1：徳島城博物館外観



図2：国指重要文化財「千山丸」  
 を見ている私たちが城と思っているのは、御殿などを取り壊して残った部分であって、取り壊した御殿の模型を見るだけでは城と思えない。

1月5日から2月20日まで、冬の企画展として「新収蔵品展」が開かれている。徳島の旧藩士の家に立派な品物が伝えられていたことに感激したが、逆にその資料を生かすための常設展示のテーマとスペースに心配も覚えた。

昨年から広い玄関ホールに徳島の土産物を販売するコーナーができていて、少し本も置いているが、徳島を紹介する本は少ない。徳島市立図書館が発行している「市民双書」の『徳島城』などを、ここで入手できるようにすることが入館者には親切だろう。

県内の他の施設にさきがけて、中学生以下は無料となっており、また交通の便のよいところに立地しているので、ぜひ来館されることをお勧めしたい。

<いしはら すすむ：友の会会員>

## 徳島市立徳島城博物館

休館日：毎週月曜、祝日の翌日、年末年始  
 開館時間：午前9時30分～午後5時  
 入館料：一般300円/学生200円  
 中学生以下無料

## [企画展]

1月5日(水)～2月20日(日)「新収蔵品展」  
 3月7日(火)～4月16日(金)「蜂須賀優品展」

## [問い合わせ先]

徳島市立徳島城博物館  
 〒770-0851 徳島市徳島町城内1番地8  
 TEL (088)656-2525

## わが町・わが家の宝物



## お釈迦さんの花

関 眞由子

4月8日はお釈迦さんの誕生日といわれ、寺院では灌仏会と称して法会が行われます。

徳島県内ではこの日、山に出かけて花を摘み、花束にして長い竹の先に結わえ、高さを競って庭先に立てる習慣がありました。「お釈迦さんの花」「天道花」などと呼ばれ、かつては盛んに行われていましたが、今ではほとんど見られなくなりました(図1左)。使われた花の種類はヤマツツジ、シャクナゲ、レンゲなどさまざま、特に決まっていない地域が多く、この季節に咲いているツツジが多かったようです。和田賢次氏によると、モチツツジに決まっていた地域もあるとのことで、みなさんの地域ではどのような花を使っていたか調べてみると面白いでしょう。

青空高く掲げた花束は、「立て枯らし」といってカラカラになるまで立て、その後も大切にしておきました。枯れた花には霊力があると考えられており、納屋の軒下などに保管しておきます(図1右)。行方不明の人があると、その花に不明者の着物を掛けて振ったり、燃やして煙のなびいた方向を探すなどしていたようです。

春になって、農作業を始める時期にあたること



図1:「お釈迦さんの花」(左)と保存されていた前年度の「お釈迦さんの花」(右)。平成元年4月、羽ノ浦町にて。

から、お釈迦さんとのかわりよりもむしろ、古くから信仰されていた田の神様を山からお迎えする儀礼、農耕儀礼が背景にあるのではないかと考えられているようです。

<せき まゆこ：友の会幹事>

## 友の会行事の記録

企画展「伊能忠敬が描いた日本」説明会

場 所：県立博物館企画展示室

日 時：10月3日(日) 11:00～12:00

講 師：平井松午氏(徳島大学教授)

長谷川賢二(博物館主任学芸員)

参加者：14名



「伊能忠敬が描いた日本」の説明会

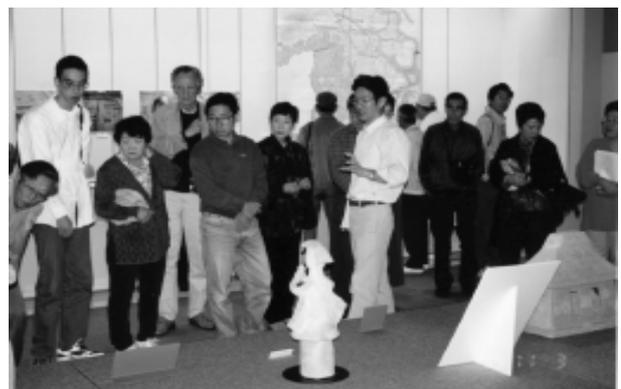
企画展「発掘された日本列島'99 新発見考古速報展」説明会

場 所：県立博物館企画展示室

日 時：11月3日(水) 11:00～12:00

講 師：高島芳弘(博物館主任学芸員)

参加者：18名



「発掘された日本列島'99 新発見考古速報展」の説明会

## 秋の研修会

場 所：香川県立歴史博物館 & 石清尾山古墳群

日 時：11月28日（日）8:30～17:00

講 師：天羽利夫（博物館館長）

参加者：42名

今回の研修会は、11月16日にオープンした高松市の玉藻公園横にある香川県立歴史博物館と峰山公園にある石清尾山古墳群の見学でした。バスの中での会員自己紹介では、朝からの雨をねたにたいへん盛り上がりました。現地に着くと、参加者の日頃の行いが良かったためか雨もやみ最高でした。

## 【秋の研修会・参加会員の意見】

古墳の上を歩いて見学したのは初めてで、大変興味深く感じられました。古墳の種類の解釈にも知らないことが多くロマンを感じます。また道中いろいろな事を教えて下さり楽しく勉強になりました。（一般）

入会して間もないのですが早速よい体験をさせていただきました。楽しい1日を過ごすことが出来ました。奈良、大阪を旅で通過するに、古墳群に出合い一度見物したいと思っておりました。素晴らしい研修に参加でき今後も出席したいと思います。（一般）

香川県歴史博物館では、できたばかりの博物館ということでビデオを中心とした説明が行われ

ており、新しい博物館ならではと思われる。今回は、時間的にビデオひまを見ている暇がなかったので、香川県の歴史は十分に理解することができなかつた。今後、香川県の歴史にも興味を持って勉強していきたい。ミュージアムショップでは展示解説がないか探してみたが開館後もないためか見あたらな

かつた。度々訪れることができない我々にとってはぜひとも用意して欲しい。

石清尾山古墳群では古代人のいづきを肌で感じることができた。よくもあれだけの石を積み上げたものだと感じた。四国の他の古墳についても勉強してみたいと思いましたが、その際参考になりますので、過去の企画展「四国の古墳」の展示解説書の増刷をお願いします。

歴史博物館は開館間もない初々ういっしい施設で玉藻公園の美しい景観と共にまた訪れてみたいと思いました。館長、直々のご案内で見学した石清尾山古墳は野趣に富んだもので、少々驚きの研修でした。猫塚の規模に驚きました。今回も興味深いものでした。ありがとうございました。

（一般）

今日はたくさんの古墳が見れて良かった。じょうもん時代の暮らし方が少しわかって、じょうもん土器で何か料理を作ってみたいと思った。（小学生）

## 第3回友の会バザー &amp; 竹でっぼうづくり

場 所：博物館実習室

日 時：12月19日（日）13:00～15:00

講 師：庄武憲子（博物館学芸員）

参加者：会員26名・職員30名

今回で3回目となる友の会バザーは竹でっぼうづくりを同時に開催しました。まずバザーについ



秋の研修会（石清尾山古墳群の猫塚にて）



わいわい盛り上がったバザーでは、手放すにはもったいないような貴重な品々がところせましと並べられ、提供していただいた方々の温かみを感じました。採集・飼育用具、標本作製用具、書籍類、雑貨品などさまざまな品物もあつと言う間に持ち帰っていただきました。なおカンパしていただいたものは、友の会の活動・運営資金として活用させていただきます。

次に竹でっぼうづくりについては、大人も童心に返り、子供達と一緒に楽しんでました。的に当てるコンテストも実施し、大いに盛り上がりました。また、わらを使っての輪注連づくりでは、会員の高田豊輝さんをご指導していただきました。

最後に品物を提供して下さった方々、カンパして下さった方々、準備・後片づけをしてくださった方々など大変お世話になりました。



作った竹でっぼうを飛ばして盛り上がる参加者

### 草だんごづくり&七草がゆ

場 所：博物館実習室

日 時：2月6日(日) 10:00 ~ 14:00

講 師：小川 誠(博物館主任学芸員)

庄武憲子(博物館学芸員)

参加者：25名

### 《事務局からのお知らせ》

これで今年度の友の会行事はすべて終了しました。来年度は、徳島県立博物館10周年の年です。記念すべき年にふさわしい楽しい行事・活動を展開していきましょう。今後ともご理解、ご協力のほどをよろしくお願いいたします。

.....

#### 会員継続のお願い

ただいま、平成12年度(4月1日~平成13年3月31日)の会員を募集しています。現在の会員数は、家族会員121組、個人会員98名、計546名です。この現在会員の方が継続していただくには、あらためて会費を納入していただくことになります。所定の振替用紙を利用していただき、継続してご加入いただきますようお願いいたします。また、お友達の方々等にも声をかけていただき、会員の輪が広がりますようご協力をよろしくお願いいたします。

「広めよう、友の会の輪、深めよう、友の会の和！」

前号(1号)から新コーナー「わが町・わが家の宝物」がはじまりましたが、今後会員の皆さんから送っていただいた原稿をもとに、紙面作りをしていきたいと思っております。皆様のご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。

あわせて「アワーミュージアム」の原稿も募集しています。皆さんからの積極的な投稿をお待ちいたしております。

#### 第12号

2000年2月10日 発行:徳島県立博物館友の会  
〒770-8070 徳島市八万町向寺山 徳島県立博物館内  
TEL 088-668-3636 FAX 088-668-7197

徳島県立博物館友の会会報

アワーミュージアム

